

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：34310

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13758

研究課題名（和文）近世日本における貨幣システムと地域社会の史的考察

研究課題名（英文）A historical study of monetary systems and local communities in early modern Japan

研究代表者

古賀 康士（Koga, Yasushi）

同志社大学・経済学部・准教授

研究者番号：50552709

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：近世日本の貨幣システムの特徴の一つとして、多様性と統合を同時に達成していたことにあるといえる。本研究は、この一見すると矛盾する状態にあった近世日本の貨幣システムを、地域社会という空間における市場と共同体の補完的な関係に着目することで解明することを目指した。2020年1月より本格化した新型コロナウイルス感染症の流行の影響で、研究計画の変更などが生じたが、研究期間中には、瀬戸内東部地域を中心にして、関係論文を3件（その他の論考1件を除く）、口頭報告を6件を発表することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義や社会的意義は、二つの点にまとめられる。一つは、世界史的に見てもユニークな展開を遂げたと考えられる近世日本の貨幣システムを理解するための視座として、地域社会における市場と共同体の補完的な関係性を本格的に導入した点である。もう一つは、これによって、東・東南アジアや南アジアの伝統社会における市場システムと共同体の関係を明らかにしてきた開発経済学など、他の隣接分野との横断的・学際的な研究に向けた議論拡張の可能性が開かれたことである。

研究成果の概要（英文）：One of the characteristics of the early modern Japan's monetary system was that it achieved diversity and integration at the same time. This research aimed to elucidate this seemingly contradictory state of the early modern Japan's monetary system by focusing on the complementary relationship between market and community in the space of local communities. The outbreak of Covid 19, which began in earnest in January 2020, forced a change in the research plan, but during the research period, 3 relevant papers and 6 oral reports were presented, mainly on the eastern Setouchi region.

研究分野：経済史

キーワード：貨幣史 地域社会 在来金融 制度的補完性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近世日本の貨幣システムは多様性と統合という二つの相反する要素によって特徴付けられる。貨幣の種類には、金・銀・銭の「三貨」のほか、藩札・私札などの紙幣があり、さらに地域ごとに独自の貨幣単位や慣行が生み出された。一方、これらの多様な貨幣は、中世日本の多層化した銭貨流通や伝統中国の「雑種幣制」などと比較した場合、地域市場においては安定的に流通し、列島規模においても「三貨」を核として統合されていたと評価される。ではなぜ、銭貨流通が多層化した中世日本や「雑種幣制」に陥った伝統中国とは異なり、近世日本の貨幣システムは多様性と統合を同時に実現できたのだろうか。

本研究は、近世日本の貨幣システムと地域社会の史的考察を通じて、この多様性と統合という二律背反的な問題を実証的分析に明らかにすることを目的とした。具体的には、西日本を中心に地域社会を基盤とした貨幣の生成と統御の実態を実証的に解明し、近世日本の貨幣システムを理解するための新たな分析枠組みの提示を試みることを目指した。

2. 研究の目的

本研究の始まりにあたって、次の二つの中核的な問いに答えることを目的とした。

(1) 近世日本の貨幣システムにおいて多様性と統合という二律背反的な要素が併存したのは、様々な経済主体や身分職能集団の社会統合の場となる地域社会が決定的な役割を果たしていたのではないか。

(2) また、近世日本の貨幣システムと地域社会の関係は、いかなる社会経済的な条件と歴史的な過程で生み出されたのか。また東・東南アジアや南アジアなどの伝統社会との比較の上で、いかなる歴史的含意は有するのか。

この二つの中核的な問いを実証的に高いレベルに解決するため、関係する地域の実証分析を進めるとともに、そこで得られた知見を他の伝統社会との比較し、日本近世の貨幣システムと地域社会の関係性を明らかにする、これが本研究の目的とするところであった。

3. 研究の方法

以上のような研究の背景・目的から、本研究がまず主要な課題としたのは近世日本の地域的な貨幣流通状況の事例分析を豊富にすることにあつた。分析対象としては、もともとの研究フィールドであった瀬戸内東部地域に加えて、新たな地域の事例分析を行うこととした。また、近世日本の貨幣システムと地域社会を分析する新たな枠組みを構築するため、共同体と市場の補完的な関係性について豊かな知見を持つ開発経済学など、隣接分野の研究を積極的に取り入れることを企図した。

4. 研究成果

このような計画のもとで本研究は始まったが、2020年1月以降に本格化した新型コロナウイルス感染症の流行によって大きく計画の変更を余儀なくされた。研究上の重要な課題であり、かつ理論的な分析への階梯ともなっていた新たな史料調査については、2020年度から2023年度上半期ごろまで、長期にわたって続いた行動制限などによって十分に実施することができなかった。事実上、本研究の主要な課題の一つであった新たなフィールドを対象とした調査・分析は、実施不可能な状況に陥ったのである。

こうした状況のなかで、研究の重点はすでに筆者が調査・分析を行っていた既存史料の再検討とそこで得られた知見を成稿化することに移されることになった。その結果、論文としては次の三点を研究期間中に発表することができた。

(1) 古賀康士「近世瀬戸内海島嶼部の貨幣と地域社会 -塩飽諸島を事例として-」(岩橋勝編『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』晃洋書房、2021年、153-173頁)

(2) 古賀康士「豪農・藩札・地域経済 岡山藩和気郡大森家を中心に」(加藤慶一郎編『日本近世社会の展開と民間紙幣』塙書房、2021年、189-231頁)

(3) Koga, Yasushi. "Competition of Paper Moneys: A Case of Japanese Early Modern Local Economy." 経済史研究, 27, 2024, pp. 186-178.

(1) は、瀬戸内海東部の島嶼地域である塩飽諸島を対象として、近世後期から幕末維新期の貨幣システムと地域社会の関係性を検討したものである。近世の塩飽諸島は、基本的に領主権力が介在しない独自の自治制度に基づいて地域運営がなされていた。本論文では、この地域特有の「銭刃勘定」や計算貨幣の分析を通じて、地域社会の共同体(コミュニティー)を基盤にして形

成される貨幣秩序の実態を明らかにした。

次いで(2)は、藩領国の藩札流通において豪農的な大規模経営体が果たした役割と機能を分析したものである。これまで岡山藩のような大藩においては、藩権力に基づく比較的画一的な紙幣流通が想定されていたが、本論文では、備前国和気郡の大國家に残された古紙幣と史料の分析を通じて、在地の地域市場における独自の貨幣秩序と、それを生み出す地域社会の構造の特質を検討した。

そして(3)では、近世後期から幕末維新时期までの備中地域の紙幣流通を対象にして、多種類の紙幣が競争的に流通する様相を示し、そうした貨幣秩序が地域社会における共同体的な相互扶助と相互監視を背景にして成立していたことを論じた。本論文は、後述するワルシャワにおける国際学会での口頭報告を成稿化したもので、筆者のこれまでの既発表論文の一部を要約・敷衍したもののだが、貨幣システムにおける市場と共同体の補完性という本研究の視座から、議論のさらなる拡張を目指したものであった。

これらの論文の成稿化と並んで、他の研究者たちの協働によって研究を深めることができたことも大きな成果であったといえる。研究期間中には、加藤慶一郎氏(大阪商業大学)、三宅俊彦氏(淑徳大学)による「私札」と「銭貨」をテーマとする科研費の研究グループに参加し、関係する貨幣史関連の研究の最新の成果と知見を取り入れることができた。また2022年度と2023年度には、日本貨幣史の研究者たちとともに海外の国際学会(於ポーランド、ブルガリア)で研究報告をする機会も得られた。海外での報告と質疑応答を通じて、今後、本研究を比較史的に位置づける足がかりの一つを設けることができた。

コロナ禍のなかで行われた本研究には数多くの制約が伴った。そのなかで、既述の通り、本研究の核となる新たな史料調査と事例分析は、残念ながら充分に実施できなかった。この点、何よりも悔やまれる。この残された課題については、今後引き続き、筆者の重要な研究課題の一つとして取り組んでいくことにしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 古賀 康士	4. 巻 27
2. 論文標題 Competition of Paper Moneys: A Case of Japanese Early Modern Local Economy	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 経済史研究	6. 最初と最後の頁 186-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24712/keizaiishikenkyu.27.0_186	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古賀康士	4. 巻 504
2. 論文標題 「日田金」と日田商人 近世日田の歴史像	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西日本文化	6. 最初と最後の頁 47-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Koga, Yasushi
2. 発表標題 Community-Based Paper Currency for Local Economy: the Case of Early Modern Japan
3. 学会等名 10th Joint Meeting of ECFN and Nomisma.org & 2nd BulgNR（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 古賀康士
2. 発表標題 近世日本の貨幣システムと地域社会
3. 学会等名 日本経済史研究所・経済史研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Koga, Yasushi
2. 発表標題 Competition of paper moneys: a case of Japanese early modern local economy
3. 学会等名 INC2022 (International Numismatic Congress) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古賀康士
2. 発表標題 豪農・藩札・地域経済 岡山藩和気郡大森家を中心に
3. 学会等名 社会経済史学会九州部会・経営史学会西日本部会合同部会 (於オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古賀康士
2. 発表標題 豪農・藩札・地域経済 岡山藩和気郡大森家を中心に
3. 学会等名 貨幣史研究会 (於オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古賀康士
2. 発表標題 17世紀における日本からベトナムへの銅銭輸出
3. 学会等名 国際セミナー・ハティン省の考古学資料から見た日越交流 (於ハティン省文化体育観光局)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 加藤慶一郎編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 埜書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 日本近世社会の展開と民間紙幣	

1. 著者名 岩橋勝編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 362
3. 書名 貨幣の統合と多様性のダイナミズム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------